

ごっこ遊びにおける発話調査報告 —関係性とストーリーづくりに着目して—

Report on a Survey of Children's Utterances in Pretend Play —Focus on Children's Relationship and Storymaking—

林 友子 (帝京科学大学)
Tomoko HAYASHI (Teikyo University of Science)

要旨： 本報告は、ごっこ遊びに取り組む幼児同士の関係性とごっこの話の道筋づくりに焦点をあて、一人一人の経験とその育ちを考察したものである。研究方法は、都内公立幼稚園（2年保育）の教職員・保護者の協力を得て、1～2週に1日保育の参与観察を行い、ごっこ遊びが展開されている場面を観察し、幼児の動き、言葉、表情、雰囲気などを記録した。分析においては、ハリデイ (Halliday) が挙げた7つの伝達機能を用いた。その考察からは、全体の文脈をつくる中核は、2人間でのイメージのやりとりとなることが多い。幼児にとっては、まず、2人の関係性を大切に、思いやイメージを互いにやりとりする経験を十分にすることが、言葉でストーリーを紡いでいく楽しさを感じることにつながる。その関係性によって、ごっこが楽しめない経験をすることもあり、展開されているごっこの中で、どのような力関係が働いているのかを見取ることが、保育者には必要である。

キーワード：ごっこ遊び、関係性、伝達機能、ストーリー

I 問題と目的

ごっこ遊び（以下ごっこと表記）は、幼児が夢中になる遊びの一つである。明神 (2005c) は、幼児期のごっこについて、幼児は大人に比べて想像力は貧弱ではあるが、制限なく活発に躍動する想像力が幼児の行動や言葉によって表現される。想像力の働きがもっとも際立って観察されるのがごっこであると言う。また、飯島 (2005a) は、2歳代の積極的な母子相互交渉の主なもの遊び場面であり、ごっこは比較的早い段階から経験のできる共同遊びであるとしている。そして、ごっこでは遊びのイメージを共有する必要があるため、見立てやテーマに関する遊びのプランをお互いに伝え合うことができなければならない、お互いが関連性のある発話を用いることでエピソードが展開される。これらの特徴から、ごっこは言語的コミュニケーションの特徴を発揮する場面であるとしている。

ごっこは、見立てにはじまり、役割の宣言、状況設定の説明にいたるまで、多くのことばが関与している。C. ガーヴェイ (Garvey, C., 1977) は、ごっこを構成する要素として「動作のプラン」「ふりをする者の役割」「ふりに用いられる物とそ

の状況設定」の三つを指摘し、それぞれの要素が、言葉によってもっともらしさを増したり、伝達を可能にしたりする (高杉, 1997d)。と述べている。

ごっこの様相は、発達によって変化していく。3歳前後からは、見立て遊びが盛んになり、テーマやストーリーのある遊びに移行していく。その中では、役割があり、それを演じたり、状況を設定したり、ルールを創っていく姿もみられる。発達にそって友達とイメージを共有できるようになり、活発に言葉をやりとりして遊ぶ中で、想像力を豊かにし、コミュニケーションの能力や自己コントロール能力など、多様な社会性を身に付けていく遊びである。と飯島は述べている。

これらのことから乳幼児期の自発的・主体的な活動の中でもごっこが、幼児の想像力の育ちや言葉の育ち、社会性等をはぐくむ遊びであることは明らかである。

日常的に繰り返されるごっこの実際は、そのストーリーの中に、ごっこを展開する幼児一人一人の経験や幼児同士の関係性が絡んでいる。ごっこの様相を一時点で捉え、そこでの幼児の言語表現や経験を論じた研究は多い。しかし、ごっこの中で、一人一人が背負う生活経験を背景にした文脈

やそこに集う友達との関係性とともなストーリーや一人一人の幼児の言葉の育ちを追った研究は少ない。

幼児は大人に比べて圧倒的に経験が少ないが、先に明神が述べているように、ごっこの中では、制限なく活発に躍動する想像力が幼児の行動や言葉によって表現される。言葉の獲得期にはあるものの、ごっこにおける言葉のやりとりは、幼児一人一人が、そのごっこのテーマをそれぞれがおおまかに共有しながら、自分の経験や社会（家庭）を背景に自分なりのストーリーをつくり、発話することを通して、共に「話の道筋」を形成していく過程にあると考えられる。共に遊ぶ幼児の関係性が希薄であると、それぞれの文脈は平行であるが、関係性が強くなればなるほどそれぞれの文脈は重なり合っストーリーが形成されている。こうした筋道を多くの保育者は、経験知の中で感覚的に捉えている。

II 研究の目的

自発的な遊びの時間の中で、自然発生的にごっこ遊びを展開する一定の集団に着目し、友達との関係性が、個々のストーリーとごっこ全体のストーリーづくりにどのように作用しているのかを捉える。

III 研究の方法

1. 観察

(1) 研究協力者

研究協力者は、東京都内の2年保育の公立幼稚園1学級25名のうち5名である。本報告では、そのうちのA児を取り上げる。

観察は4歳児6月から5歳児の11月までの約1年半に亘った。

・A児…6月生まれ。一人っ子で母親は外国籍（タイ）である。入園前は関西方面の幼稚園で、3年保育3歳児として幼稚園生活を経験。

(2) A児を協力者とした理由

観察場面をごっこ遊びに設定したことから、まず、ごっこ遊びに取り組むことが多い幼児として選んだ。また、時折聴きなれない言葉が発せられることもあったため、発話の育ちを追いたいと考えA児を選んだ。

(3) 観察の方法

観察は、2016年6月～2017年11月に1～2週に一回参与観察を行った。自ら選んで行う遊び（自由な活動形態）の中で、ごっこ遊びが展開されている場面を観察し、幼児の動き、言葉、表情、その場の雰囲気などを記録（メモ）する。また、カメラで撮影するとともに、幼児の声を拾える距離にICレコーダーを置き、録音した。それらの記録を、幼児の発話を中心に書き起こし、発話の意味するところ、心情、関係性等について分析する。

(4) 倫理的配慮

観察に際しては、研究協力園の園長、担任保育者、保護者に対して、研究の目的や調査内容と方法、個人情報の保護に関して書面と口頭で説明を行った。調査への協力はいつでも中止でき、それによる不利益は生じないことなどを伝えた。また、「聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理委員会規定第7条第6項」による審査を受け、承認を受けた。

2. 分析

関係性を分析する視点としてハリデイ(Halliday)が挙げた次の7つの伝達機能を用いた（無藤, 1990b）。

- ① 道具的機能：「私は～を欲する」機能。言語は言語使用者が自分の欲しているものや自分の望んでいる他者の援助を受けられるようにする。
 - ② 支配的機能：「～～して」や「～～してはだめ」などの発話に見られるように他人の行動を調整し、支配する機能である。
 - ③ 相互作用的機能：「我と汝」の関係性を表現する機能。あいさつや、相手を認め合っていることを伝える発話。
 - ④ 個人的機能：自己認識。自己表現にかかわる表現。例えば個人の興味、喜び、嫌悪等に関する表現。「ここに私がいる」機能。
 - ⑤ 発見的機能：「私に教えて」の機能。世界についての情報を手に入れる表現。
 - ⑥ 想像的機能：歌、物語、神話、科学など、現実の世界を超えて「今、ここ」を越えるための表現。
 - ⑦ 告知的機能：他人がもっていない情報を他者に伝達したり、他者からの「発見的」質問に答えたりして情報を伝達する機能。
- 伝達相手に対して、上記の機能が何回使われて

いるか、発話数をからその関係性を分析するとともにA児の心情変化、を捉えた。

V 結果と考察

1. ごっこ遊びの中の発話の実際

事例 1.H28.11.4

状況：保育室で、A児、B児、C児、D児の4人がままごとをしようとしている。ポポちゃん人形を子どもに見立て、A児は中型箱積み木で学校を作ろうとしている。

*下記Tableの発話後の番号は先の七つの機能を示す。

Table A児-1 H28.11.4

A児1 中型箱積み木で学校を作ろうとしている「だれかてつだってよ～」と叫ぶ。 【①】

B児1 「ちょっとまっててください。あかちゃんがおきないようにだれかてつだって、あかちゃんがおきたときのために、まって…」とD児に言いながら、A児の方へ行こうとする。(赤ちゃん、カメのぬいぐるみ) 【①】

D児1 「Bちゃん まって」 【②】

B児2 「あの…あかちゃんみはってて」D児に家に残っているように頼む 【①】

D児2 「ちょっとみはっててくれない、赤ちゃんのこと」と観察者に言う 【①】

D児3 観察者が受け止めると、「そうとね」と注文をつけて、B児のところへ行こうとする。

C児 一人で保育室をうろうろする。

A児2 「ねえ、Cちゃん、おねえさんになってくれる？」 【①】

C児1 「うん？」 【⑤】

A児3 「おねえさん」 【①】

C児2 「いいよ」 【③】

A児4 「でもごにんひつようだけど、さいごのひとりどうする？」 【⑤】

A児5 「〇〇ちゃんもおかあさんだし…そうだ！…おんなのこさがそ！」と出かけようとする。 【⑦】

D児4 「ちょっといってきまーす」とA児についていこうとすると、つまづく。 【④】

A児6 「あっだいじょうぶ？」 【③】

D児5 「うん」 【③】

A児7 「ちょっとまって、CちゃんとDちゃんは、…だから」と家で待っているように指示をす

る。 【②】

A児8 「ここ、がっこう！」学校(狭い)の中には入らないように言う。 【⑦】

A児9 「DちゃんとCちゃん、くるまでに…おうちでまってて」 【②】

(自分が戻ってくるまで、家で待っているように言う)

B児3 「わたし、こどもがいるの」(家に置いてきたカメのぬいぐるみ) 【⑥】

A児10 「うん、でも、じゃあ、おっきいこどもはがっこうなの！」 【⑥】

B児4 「わたし、がっこうのおっきいこどもいるじゃない？」 【⑥】

A児11 「うん、あっ、そうだよ。でも、A、ちっちゃく見えるけど」 【⑦】

B児5 「わたしはおっきいのよ」(赤ちゃんのことを言おうとしている) 【⑦】

A児12 「このこね(ぬいぐるみ2体)…ここ…4さいと5さいのがっこうなの」 【⑦】

D児6 「あたし5さいだよ、あたし5さい。5さいのこはいいけどね」 【④】

(D児はぬいぐるみを持っていない、…全て使われてしまっていた)

C児3 「このこは5さい、このこはいいけどね」とD児のことを指して言う。 【⑦】

A児13 「うん、6さいはだめだよ」 【⑦】

C児4 「じゃあ、4さいと5さいいじょうってこと？」 【⑤】

A児14 「うん…そうだみたいね」 【⑦】

B児6 「このこ4さい」家の中に寝かせてあったカメのぬいぐるみを指して 【⑥】

A児15 「4さいはいいよ」 【⑦】

D児7 「このこはいけるね」B児のカメのぬいぐるみを指して 【⑦】

A児16 「うーん、これだけ？」ぽぽちゃん人形やぬいぐるみを指して 【⑤】

B児7 「これだけしか…」 【③】

D児8 「うん」 【③】

A児17 「このこたちは？なんさい？」と、ポポちゃん人形やぞうのぬいぐるみを指して 【⑤】

B児8 「このこがいっさい」(ポポちゃん人形を指して) 【⑦】

B児9 「さんさい」(みつふいーのぬいぐるみ) 【⑦】

B児10 「…にさい」(もう一人のポポちゃん人形) B児はカメ以外にも3体ぬいぐるみを持つ

- 〔⑦〕
 [A児18] 「じゃあ、わたしたちつれていってあげよう」(学校へ) 〔④〕
 [A児19] 「おかあさんはあっちでまってて」 〔②〕
 [D児9] 「じゃあおねえさんってことでいい？」 〔④〕
 [B児9] 「おねえちゃんでもいいわよ」 〔③〕
 [A児20] 「あれ？ちょっとC！Cいそいでくれな
 い～？」 〔①〕
 C児を探しに廊下へ走っていくが、すぐに戻って
 くる。
 [B児12] 「おしごとしなきゃいけないでしょ だ
 から…」(家から出てA児を追おうとしている) 〔⑥〕
 [A児21] 「ごはんとかたべるにはあかちゃんたち
 にミルクあげようとおもってた？」 〔⑥〕
 [B児13] 「あっ、ミルクあるからちょっとまって
 …」(ポポちゃん人形にあげようとする) 〔⑥〕
 [D児10] 「わたしもきょう おしごとなんだわ…」 〔④〕
 [A児22] 「ちょっと！」強く言う。(D児は学校に
 行くんでしょ！という意味) 〔②〕
 [B児14] 「おねえちゃん、おねえちゃんもがっこ
 ういく？」D児に問いかける 〔⑥〕
 [D児11] 「きょう、きょう、プリキュアのおしご
 ともある」 〔⑥〕
 [B児15] 「え、えいごもならってるから、えいご
 もいくでしょ！」 〔⑥〕
 [A児23] 「ねえねえ、いこ！」D児に呼びかける 〔①〕
 [D児12] 「えいごはならってないんだけど！」B
 児の言葉から現実を思い出す。 〔⑦〕
 [B児16] 「ほんとうのことじゃないから にせも
 のってことだから ほんとうにいてるってこと
 じゃなくて…」 〔⑦〕
 [A児24] 「ねえねえちょっとまって～さんにんと
 もはいれないから～プールがある」自分が先頭にな
 って入りたい。 〔⑥〕
 [B児17] 「プールもあるから いかなきゃいけない
 のよ！」 〔⑥〕
 [A児25] 「はいろう！」積み木で囲ったプールへ
 ぬいぐるみをもって入る。 〔⑥〕
 [D児13] 「さあ どうしようどうしよう」(ぬいぐ
 るみを持っていないので…) 〔⑤〕
 [A児26] 「あかちゃんたちようこそ、わたしたち
 のがっこうへ」 〔⑥〕
 [B児18] 「そとからみてるってことに…」(連れて

- きたお母さんはプールを外から見る) 〔⑥〕
 [D児14] 「わたし、わたしも入る…」 〔④〕
 [A児27] 「でもドアここだよ、でもかぎがかかっ
 てる」 〔⑥〕
 [D児15] 「あっドア でもどろぼうのかぎもって
 る」 〔⑥〕
 [A児28] 「あっ そう？」(軽く流す感じ) 〔③〕
 [D児16] 「でもリュックもってない…」(プールに
 入るためにはリュックが必要だと言う意味) 〔⑦〕
 [A児29] 「リュックなくてもいい…これだけでい
 い」 〔⑦〕
 [A児30] 「閉めてちゃんと！」D児があけたプー
 ルのドアについて言う。 〔①〕
 [D児17] 「鍵閉めてないから…いいよ 入って」
 B児を入れる。 〔⑥〕
 [B児19] 「あかちゃん鞆わすれてたよ」「赤ちゃん
 用のかばん…」 〔⑥〕
 [A児31] 「みんなの給食、Bちゃんねえねえ、赤
 ちゃんねミルク飲ませてくれない？」 〔⑥〕
 [B児20] 「赤ちゃん…」自分の赤ちゃんを抱っこ
 している。 〔⑥〕
 [A児32] 「ちょっと私赤ちゃんの給食つくるね」
 (一人で作り始める) 〔⑥〕

表1 A児の発話数とその伝達機能の内訳

A児の発話数		32回	伝達相手への回数 (相手-回数)
伝達機能	①道具的	6回	全員-1, C-3, D-2
	②支配的	4回	全員-1, C-2, D-3
	③相互作用的	2回	D-2
	④個人的	2回	全員-1
	⑤発見的	3回	全員-3
	⑥想像的	7回	全員-4, B-2, D-1, T-1
	⑦告知的	8回	全員-2, B-3, C-2, D-1

○A児のストーリー

A児はごっここの場をつくり、C児にお姉さんの役割を求める。さらに、ごっこ全体の人数を具体的に5人と設定するが、1人足りないことに気付く。M児が目に入るが、M児はすでに他のごっこでお母さん役になっていることが分かり、「おんなのこ」を探そうとする。探してくるまで学校には誰も入って欲しくないため、他児に家で待っているよう指示をする。そして、学校に入れる子

供の条件（大きい子供⇒4歳と5歳⇒6歳はだめ）を他児とのやりとりで見出していく。A児のイメージを一方向的に他児に強いたい、また、他児もこれを受け止める関係性から道具的機能を持つ言葉が多く使われる。

学校に集まった子供の人数が少ないと感じ、他児が家に置いてきたぬいぐるみを指して何歳か尋ねる。そして、1歳から3歳児も学校へ連れていく。学校（中型箱積み木で囲った場）が狭いことに気づき、他児は入らないよう指示をだし、ぬいぐるみの1～3歳児を入れる。さらに、その場が急にプールにかわる。赤ちゃんにはミルクが必要であることと、学校には給食があることを思いつき「赤ちゃんの給食づくり」に入っていく。役や場の設定が落ち着くと、そこへ子供（赤ちゃん）を連れていくイメージが紡がれる。その後は給食づくりとなる。

他児がA児のイメージを受け止めて動く関係性の中で、徐々に想像的機能を持つ言葉が多用されはじめる。

○他児との関係性（表1参照）

- ・①から⑦の機能のうち、③の相互作用的機能を除く機能は、全員に対して使われているが、③の相互作用的機能はD児のみに2回遣われている。A児にとって、C児とD児は、自己主張を受け止めてくれる相手として、自我を出しやすいものと思われる。
- ・A児は、自我を出しやすいC児とD児との関係を基盤に、全体に向けて自分のイメージをなげかけながらその実現を図ろうとしている。

事例2 H29.6.16

状況：登園後、学級全体で集まり、動物づくり（この週に動物園への遠足を経験している）について担任から話しを聞く。2つのグループに分かれ、グループごとに時間差をつけて製作するという内容。A児、B児、E児は、後半に作るグループとなり、話が終わるとすぐに、ままごとコーナーを目指して、集まる。集まりながら、「にゃんにゃん」と言っている。

Table A児-2 H29.6.16

A児1 「Bちゃん、きょうおかあさんにして」
①
E児1 「わたしおかあさん…ねこのおかあさん」
④

B児1 「わたしおねえちゃん」 ④
B児2 「おかあさん！スカートどうぞ」引き出しから取り出してA児に渡す。 ③
A児2 「あ、スカートある」赤のスカートを身に付けている。 ④
B児3 「ちがう、ねこちゃんの…」 ⑦
A児3 「あ、ありがとう！」スカートを出してくれたことに対して ③
B児4 「おねえちゃん あかにする」 ④
A児4 「あたしね あか あかの △△ するんだ～」 ④
~~~~~  
A児5 「おねえちゃ～ん これ〇〇くんのてっだってちょうだ～い」 ①  
他児の鞆が廊下にあり、それを片づけるように言う。  
E児3 「にゃあ にゃあ」 ④  
B児5 「きょうは がっこうが あるう…」  
「いってくるわ～」 ⑥  
E児4 「おねえちゃ～ん」「わすれないでね～」 ⑦  
B児6 「がっこうのほんはどれだっけ…」 ⑤  
B児7 「ねこちゃ～ん、か、かえりにほんかってくるから、ほんおくとろみといてくれる～」 ②  
(家の中で本を置くところを探しておいてほしい)  
E児5 「にゃあ にゃあ」 ③  
A児6 「わたしがみとくは、おねえちゃん △△ かもしれない」E児にB児についていくよう促す。 ⑥  
E児6 「にゃあにゃあにゃあ にゃにゃん」③  
B児8 「えっ いれて（一緒に行って）くれるの？」 ⑤  
E児7 「はちねんせいに なったらね」 ⑥  
B児9 「いってきまーす。あつ、きょうはねこちゃんが がっこういくひだわ ねこちゃんいこ！」 ⑥  
E児8 「にゃあ にゃあ」 ⑥  
B児10 「いかないの？」 ⑥  
E児9 「にゃ にゃ」(行かないという思いを入れて) ⑥  
B児11 「ほんかってあげるよ かえりにかう？」 ⑥  
B児12 「あつあと80つぶん、いそいで ねこちゃん たっていいよ」 ⑥

B児13 「あるいて たって いくわよ」 E児が四つん這いでくるのを見て言う。 【⑦】

E児10 「にゃん にゃん にゃん 」 B児とE児は立って廊下へ出ていく 【⑥】

A児7 一人で家づくりをする。サークルをつなげて広くしていく。

A児8 「おねえちゃんたちかえってこないな…」と、独り言をいう。 【⑥】

A児9 「ねこちゃんかってんだけど…」と近くにいる観察Tに言う。 【⑦】

観察T 「どこにおでかけしたの？」

A児10 「おでかけじゃなくて がっこうなのねこちゃんもねこちゃんもいっしょにいけるがっこうにいったけど…」 【⑥】

B児14 「ただいま～！」 【⑥】

A児11 「おかえり～おそいわよ！」 【⑥】

B児15 「けーきやさんによつてたから…」 【⑥】

E児11 「ねえ、こっちさ…ショートケーキやさんにしない？」 【⑥】

B児16 「ねこちゃんーん、ほんみる～ さっきの？ねこちゃん ほん さっきのねこちゃんのために、かってきたのよん、ねこちゃん」 【⑥】

E児12 「にゃにゃ つくりかたがあるにゃんこれに」と絵本の部屋？からもってきたケーキの本を開く。 【⑦】

E児13 「こむぎこ」 【⑥】

A児12 「こむぎこ きょうないの…」 【⑥】

E児14 「かってくるにゃん」 【⑥】

B児17 「かってく？いっしょにかって △△」 【⑥】

A児13 「あたしがかうわ！」と少しきつく言う。 【④】

A児14 「ねこちゃんーん、ねこちゃん、ねこちゃんのいえにはいりなさい」 【⑥】

B児18 「ちょっとまってにゃん」 【⑥】

B児19 「△△ がこむぎこかってきてにゃん」 【⑥】

B児20 「あっ、かってこよう」 【⑥】

B児21 「にゃんちゃんがこむぎこかってきてくれるって」 【⑥】

B児22 「ねこちゃーん このほんもおもしろいわよ」 【⑥】

B児23 「ねこちゃん よまない？」 【⑥】

E児17 「にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃ」 【⑥】

B児24 「あかちゃん」 E児に呼びかける。 【⑥】

E児18 「にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃ」 【⑥】

B児25 「あっぷっぷ～」 赤ちゃんねこのE児をあやすように。 【⑥】

E児19 「にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃ」「にゃ～にゃにゃ」 【⑥】

E児20 「にゃのにゃのにゃん」 【⑥】

A児15 「ぴんぽーんぴんぽーん」 買い物から戻ってくる。 【⑥】

B児26 「あっ、おかあさんだよ」 【⑥】

A児16 「こむぎこなかったからね かわりにアイスかってきたよ」とアイスの空き箱を手にしている。 【⑥】

E児21 「あ～あ こむぎこにゃん」 【⑥】

A児17 「△△より よかった？」 【⑥】

E児22 「こむぎこにゃん これ こむぎこ こむぎこにゃん」 【⑥】

E児23 「おさらをよういしてん」 【⑥】

A児18 「おさら、ここにおいてあるから」 【⑦】

E児24 「ボールがないといけない」 【⑦】

A児19 「あそこに あそこにおいてあるけど」 【⑦】

E児25 「ボールがないといけないにゃん」 【⑦】

A児20 「なに？いま？」（“ボール”が分からない） 【⑤】

E児26 「うん」 【③】

A児21 「あっ わたし だしてあげる あぶないからね」 【⑦】

A児22 「これであってる？」と、ボールを流し台の上にもってくる。 【⑤】

E児27 「うん ひくい だと だめなの」(床の上ではだめ) 【⑦】

A児23 「ねこちゃん ひとりでできるの？」 【⑥】

E児28 「それで おさとうを いっぱいいれるにゃん」 【⑥】

A児24 「ねこちゃん りょうりできる？」 【⑥】

E児29 「できるにゃん」 【⑥】

B児23 「あっ、だめそれだめ しょうゆはつかわないうって」 A児がだしてこようとした調味料を見て B児が言う。 【⑥】

B児24 「はは、まちがえてる」 A児に言う。 【⑦】

E児30 「つぎはおさとういれて…」 【⑥】

B児25 「さくらんぼケーキにしない？」 さくらんぼを見付けて手にしている。 【⑥】

E児31 「いいわよ！」 【③】

B児26 「さくらんぼを…」 【⑥】

A児25 「おねえちゃんおねえちゃん おへやにはいって…」 本棚と椅子と机がある部屋をさして

- 【⑥】  
 [A児26] 「おちつかないとちょっといやから、おべんきょうをこっちでやんないとな」 B児の居場所を提示する。 【⑥】  
 [A児27] 「おべんきょう終わったらこっちにもどってくれば…」 【⑥】  
 [A児28] 「こっち」 【⑦】  
 [E児32] 「おちやができるんにゃんから ちょっと まっててにゃ」 【⑥】  
 [E児33] 「おちやをいれて △△パンができるにゃんから」 【⑥】  
 [B児27] 「できる？」 【⑥】  
 [B児28] 「あっ！ ろくねんせいから もうはちねんせいになったんだ」 【⑥】  
 [B児29] 「はちねんせいのほん…」 ケーキの絵本を見ながら言う。 【⑥】  
 [E児34] 「おめでとうにゃん」 【⑥】  
 [A児29] 「おねえちゃんおなかすいたらいってねクレクレレープよういしとくから」 【⑥】  
 [B児30] 「ねこちゃん おみせではべてこようよごはん」 E児を誘う。 【⑥】

- …」 【⑥】  
 [A児33] 「ねこちゃん～おいていっちゃうわよ」 【⑥】  
 [E児36] 「おさんほいきたいにゃん」 【⑥】  
 [A児34] 「おさんぽ？」 【⑥】  
 [E児37] 「ちょっとまって」 【②】  
 [B児33] 「おさんぽじゃなくて レストラン！ おかあさん（猫の）こっちだよ」 【⑥】  
 [A児35] 「これからレストランいこ！」 【⑥】  
 [E児38] 「いきたくない…」 と、かぶと虫の飼育ケースの中の様子を見る。 【⑥】  
 [A児36] 「これからレストランいこ！」 【⑥】  
 [B児34] 「みちがまよっちゃうから これもったかない」と、自分で作った時計を掛けてあるところからとり、A児と出かける（絵本の部屋へ）。 【⑥】

○A児のストーリー

A児は、B児にお母さん役なってもいいかを尋ねる。役が決まると、B児とE児の学校へ行くイメージを受け止めて、家で待つ。帰ってきたE児が“ケーキの絵本”（絵本の部屋が学校になっていて、そこから持ってきた）から「ケーキやさん」をイメージする。これを受けとめて、小麦粉を買いに行く。

B児がE児のケーキづくりに加わろうとすると、A児は、B児は勉強をする必要があると考え、勉強部屋へいくように指示する。さらにB児に「おなかすいたらいってね、レープ用意しとくから」と、母親らしい言葉をかける。B児（お姉さん）からレストランに誘われて、嬉しそうにレストランへ行く。

遊びの始めから役と遊びのイメージがはっきりしているので、想像的機能をもつ言葉が多用される。

○他児との関係性

・事例①では、A児は、その当時自己主張をとおしやすいC児とD児との関係を基盤に、一緒に遊ぶ友達全体に向けて自分のイメージを一方的になげかけながらその実現を図ろうとしていた。この事例2では、①道具的機能や②支配的機能をもつ言葉が減り、自分がB児やE児に受け入れられているかどうかを確かめながら、B児やE児の言葉やイメージを受け止め、お母さんが留守番をする、ケーキを作る、勉強を指示するなどのストーリーを作っている。

表2 A児の発話数とその伝達機能の内訳

注釈：観は、観察者。自己中心語は、独り言

| A児の発話数 |        | 36回 | 伝達相手への回数<br>(相手-回数)    |
|--------|--------|-----|------------------------|
| 伝達機能   | ①道具的   | 2回  | B-2                    |
|        | ②支配的   | 0回  |                        |
|        | ③相互作用的 | 3回  | B-3                    |
|        | ④個人的   | 3回  | B-3                    |
|        | ⑤発見的   | 2回  | E-2                    |
|        | ⑥想像的   | 21回 | B-8, E-12, 観-1, 自己中心語1 |
|        | ⑦告知的   | 5回  | B-1, E-3, 観-1          |

- [A児30] 「いいわね」うらやましそうに言う。 【③】  
 [B児31] 「おかさんもいっしょにいこっ！」 A児の気持ちをすぐに察している。 【⑥】  
 [A児31] 「いいよ」 【③】  
 [E児35] 「できたにゃんよ おちやが」「おちやができました」 【⑥】  
 [B児32] 「ほっとけーきやさんいこう！」 【⑥】  
 [A児32] 「いいわよ！」 「いこうとしたら……のに

- ・年少時に見られた自己中心性が薄れ、自分がB児やE児に受け止められ、反対に、自分がB児やE児を受け止めて遊ぶ心地よさを感じているのではないだろうか。

## 2. A児の変容について

A児について、4歳児から5歳児に亘る1年半の観察期間中に14事例を記録、分析した。

紙面の都合上割愛するが、A児の友達との関係性は、相手によって多様である。

A児は、年少児においては、はじめは自己中心性が強いものの、同じ友達とごっこを楽しむことで、互いにイメージを重ねて遊ぶことを楽しむようになった。しかし、年長の2学期から一緒に遊ぶ友達に変化が見られ、それまで遊ぶことがなかった相手との関わりも見られるようになる。すると、自分が相手に受け止められているかどうか気になる言動も見られ、ごっこへの取組もあまり見られなくなった。

A児の変容を下表にまとめた。

表3 A児の変容（上から下へ時系列）

| 関係性                     | 言葉の使われ方                           | ストーリーづくり                                        |
|-------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------------------|
| 自己中心性が強い                | 道具的機能や支配的機能を多用                    | 自分のストーリーを一方向に実現                                 |
| 友達との関係を上手く作れない          | 道具的機能や支配的機能を遣う                    | 友達のイメージが分からず、一人で自分なりのストーリーを作る                   |
| 特定の友達の思いを確かめ、受け止める      | 自己中心的な言葉が減少し、想像的機能を使うことが多くなる      | 自分のストーリーと友達のストーリーをすり合わす<br>全体のストーリーが共有されていく     |
| 遊ぶ相手が広がり、相手の思いを確かめながら遊ぶ | 発見的機能<br>相互作用的機能<br>告知的機能をもつ言葉を遣う | 友達のストーリーを受け止め、自分のストーリーを合わせて遊ぶが、ごっこ遊びをすることが少なくなる |

## 3 まとめ

ごっこ遊びは、一人一人のストーリーのすり合わせが行われていく中で、ごっこ全体の文脈がつくられていく。

調査の結果、全体の文脈をつくる中核は、2人間でのストーリーのやりとりとなるが多かった。幼児にとっては、まず、「私とあなた」という2人の関係性を大切にし、思いやイメージを互いにやりとりする経験を十分にすることが、言葉でストーリーを紡いでいく楽しさを感じることにつながる。

ハリデイの7つの機能をもつ言葉は、幼児同士の関係が安定し、ごっこのイメージが共有されて楽しくなるほど道具的機能や支配的機能をもつ言葉は少なくなり、相互作用的機能や想像的機能をもつ言葉が増えていく。

年長と言えども、関係性が広がったり危うくなりすると、ごっこが楽しめない経験をすることもある。

展開されているごっこの中で、どのような力関係が働いているのかを見取ることが、保育者には必要である。

## 引用文献

- 飯島典子（2005）「2歳児の母子ごっこ遊び場面における会話の発達的变化」東北大学大学院教育学研究科研究年報第55集・第2号
- 無藤隆・高杉自子編 保育講座保育内容「言葉」（1990）113ミネルヴァ書房
- 明神とも子（2005）「幼児のごっこ遊びの想像力について」北海道教育大学釧路校研究紀要第37号
- 高杉自子・岩崎婉子編著 演習保育講座9 保育内容「言葉」（1997）